

近代秩序における尊厳と公正

——平等主義への社会システム理論的接近——

東洋大学 小山 裕

1 社会システム理論と近代秩序の複数性

社会システム理論の立場から近代の複数性を理論化するための一つの道筋を示すことが本報告の目的である。近代の複数性は、社会システム理論がこれまで不十分にしか取り組むことのなかった事象の一つである。システム理論は、近代社会を一つの社会システムと想定することで、近代社会間の差異よりも構造上の共通点に焦点を当ててきた。その際に基底的な役割を果たしたのが分化という概念である。近代社会は、社会共同体が宗教や政治や経済から分化していくプロセスとして (Parsons 1971=1977)、あるいは、階層分化から機能分化への構造転換として (Luhmann 1997=2009)、その成立が捉えられることで、何らかの特有の分化構造を備えた社会として理論化されてきたのである。

しかしながら、機能分化という社会構造が多くの近代社会に見出されるとして、それぞれの社会での機能システムの意味づけや作動様式は、大きく異なりうる (Eisenstadt 2000)。また経済や科学や愛をめぐる機能的なコミュニケーションが世界大に広がっていることをもって、今日の社会を機能分化した世界社会と捉えることができたとしても (Luhmann 1971)、そこに至るまでのプロセスが同一であるとは限らない。またグローバルな機能的コミュニケーションが成立していたとしても、その連鎖の中でローカルな屈折が生じる可能性を排除することはできず、それゆえ複数の社会間での経済や科学を介した交流がそれらの間の構造的な差異を消滅させるかは予断を許さない。いずれにせよ、社会システム理論が文明分析 (Arnason 2003) や価値変動論 (Inglehart and Welzel 2005) などの他の近代社会理論と対話を行っていくためには、近代の複数性を捉えるための装置を導入する必要がある。

そこで本報告は、社会システム理論にもとづく近代の複数性の理論化のために、機能分化社会の概念を複数化させるという方途を探求する。そのための手がかりとして本報告が着目するのは、近代秩序を方向づけるものとしての平等主義である。これを社会システム理論に組み込むことで、機能分化社会という近代秩序像を分節的に捉えることが可能になる、というのが本報告の見通しである。

2 平等主義と機能分化

比較法学者のジェームズ・ウィットマンは、ドイツとフランスに代表される大陸ヨーロッパとアメリカ合衆国の比較を通じて、2つの相反する近代的平等主義の理念型を構築した (Whitman 2000, 2004)。一方の大陸ヨーロッパの近代に見られるのは、あらゆる出自の人間が等しく丁重に取り扱われるべきである、という規範である。この「今やわれわれは全員が貴族である」という意味での平等を目指す方向性をウィットマンは格上げ平等主義と呼ぶ。これが重視するのは、互いに敬意を払い合うという姿勢であり、名誉や尊厳の保障が基底的な価値となる。これに対して、アメリカ合衆国に見られるのは、いかなる出自の人間であったとしても同一のルールに則って取り扱われるべきである、という格下げ平等主義である。これは旧体制から継承された価値を否定し、「もはや誰一人として貴族ではない」という想定から出発することになったアメリカ合衆国に固有のメンタリティであり、尊厳よりも、自由の公正な保障がより重視される。なおウィットマンは、この格上げ平等主義と格下げ平等主義の違いを尊厳と自由のどちらをより基底的な価値とするかという対立と捉えるのであるが、この報告では、それぞれを尊厳と公正 (fairness) によって特徴づけることにしたい。名誉の観念にその出自の一つをもつ尊厳という理念は、相互行為に制約をかけるが、自由一般と対立するわけではない。

これら2つの平等主義は、階層分化克服の方向性に違いによって区別されているため、機能分化とい

う社会構造を分節化する手がかりとなる。機能分化は、一般に身分拘束的なコミュニケーションから解放された機能的コミュニケーションの全面展開を特徴とする。換言すれば、さまざまな機能的コミュニケーションへの参加が、純粹に機能的観点からのみ、公正に保障されることを機能分化という社会構造は、前提としているということである。

しかしながら、これまでの社会システム理論は、機能分化が端的に階層分化からの離脱と断絶のみによって確立されると理論化してきたわけではない。たとえばニクラス・ルーマンは、階層分化における上流階層への資源の集中が機能分化への構造転換に有利に作用したことを指摘している (Luhmann 1997=2009)。ともにヨーロッパの経験にもとづいた理論化であるから当然のこととはいえ、ウィットマンの格上げ平等主義仮説とルーマンの機能分化社会理論の間には一定の親和性がある。これはルーマンの機能分化社会理論が尊厳を生み出す社会システム——さしあたり敬意システムと呼んでおく——を暗黙のうちに前提としている可能性を示唆する。事実、ルーマンは、かつて尊厳と自由を備えた諸個人と機能分化秩序の相補性を理論化していた (Luhmann 1965=1989)。このことは、他方で、ルーマンの機能分化社会理論が格下げ平等主義を基礎とする近代秩序を適切に理論化しえていない可能性を含意する。

3 機能システムへの包摂と敬意システム

本報告では、ヨーロッパ型の機能分化社会における敬意システムの機能を法システムに関わるいくつかの事例にもとづいて例解し、同時に、これと対比させることで、敬意システム不在の機能分化社会の特徴を浮かび上がらせる。この比較を通じて、機能システムへの包摂プロセスの方向性の違いとして2つの機能分化社会という秩序を理論化するを示す。その上で、現在のグローバル化を機能分化した世界社会という観点から捉えることの理論的意義を再確認したい。

文献

- Arnason, Johann P., 2003, *Civilizations in Dispute: Historical Questions and Theoretical Traditions*, Leiden: Brill.
- Eisenstadt, Shmuel N., 2000, "Multiple Modernities," *Daedalus*, 129(1): 1-29.
- Inglehart, Ronald and Christian Welzel, 2005, *Modernization, Cultural Change, and Democracy: The Human Development Sequence*, New York: Cambridge University Press.
- Luhmann, Niklas, 1965, *Grundrechte als Institution: Ein Beitrag zur politischen Soziologie*, Berlin: Duncker & Humblot. (=1989, 今井弘道・大野達司訳『制度としての基本権』木鐸社.)
- Luhmann, Niklas, 1971, "Weltgesellschaft," *Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie*, 57: 1-34.
- Luhmann, Niklas, 1997, *Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2009, 馬場靖雄ほか訳『社会の社会』法政大学出版局.)
- Parsons, Talcott, 1971, *The System of Modern Societies*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall. (=1977, 井門富二夫訳『近代社会の体系』至誠堂.)
- Whitman, James Q., 2000, "Enforcing Civility and Respect: Three Societies," *Yale Law Journal*, 109: 1279-398.
- Whitman, James Q., 2004, "The Two Western Cultures of Privacy: Dignity Versus Liberty," *Yale Law Journal*, 113: 1151-221.